

## 田山花袋『古駅』論ノート

——語り手の役割と鮫島晋の存在、そして情況としての藤村詩をめぐる——

市川 浩 昭

### はじめに

大正九年十一月、新潮社より『現代小説選集』が刊行された。これは田山花袋と徳田秋声の生誕五十年を祝う記念行事の一つとして企画された。編者は島崎藤村、長谷川天溪、有島武郎、片上伸である。藤村はこの本に序文と小説『理学士』を寄稿している。この作品は大正九年四月に雑誌「太陽」に発表した『斎藤先生』<sup>(1)</sup>を改題したものだ。

これは藤村の小諸時代の同僚、鮫島晋をモデルに創作した作品である。

鮫島は『破戒』<sup>(3)</sup>の風間敬之進のモデルとされ、『千曲川のスケッチ』<sup>(4)</sup>では「田舎教師」として「学士は幾多の辛酸を嘗め尽して来たやうな人」と紹介される不遇な人だった。藤村はなぜ、鮫島へのオマージュを示した小説を花袋と秋声を記念した選集に収めたのであろうか。

明治三十九年十一月二日から五日にかけて、神津猛<sup>(5)</sup>の招待に応じた花袋は藤村とともに信州北佐久郡志賀村の神津宅を訪問、二日間滞在した。この時、藤村は神津に鮫島の招請を依頼した。花袋と鮫島はここで出会うことになる。他には藤村の教え子の中沢べんがいた。そして四日、磯部鉦泉

に向かう途中、追分の油屋旅館に立ち寄った。この模様を花袋が小説化したのが、明治四十一年一月、雑誌「文章世界」に発表した『古駅』<sup>(6)</sup>である。中仙道と北国街道の分岐点である追分宿は、江戸時代、特に参勤交代の制度化とともに交通の要衝として発展、繁栄した。しかし、明治維新以降、旧幕時代の制度が廃止され宿駅としての役目を終えた。さらに明治二十年頃から鉄道も整備され人の流れが変わってしまった。かつて繁栄を誇った油屋も時代の趨勢に押され衰退を極めたのである。

この現実には、花袋にも深い印象を残した。『古駅』のほかに、花袋が執筆した二つの追分の紀行文にこの感慨が示されていることから、それは明らかだ。追分と油屋の衰退は時代の変遷ばかりではなく、花袋の記憶においてもメルクマールとなった。

ところで藤村が選集において『理学士』と改題したのは、廃れゆく追分と鮫島をモデルとした理学士の不遇の現実を花袋が『古駅』に描いたことを意識したからではないか。実は『古駅』に示された理学士への関心には、大正期の花袋の文学の展開にかかわる重大な要素があると思われる。そして藤村はそれを認めていたと論者は推察している。

そこで『古駅』の意味を、語り手の役割に着目して、理学士の存在とそ

の描かれ方、小諸時代の藤村詩を視野に入れ考察する。さらに花袋における『古駅』の意義に触れてみたい。

### 『古駅』における語りの仕組み——共感をめぐって——

『古駅』の冒頭には、明らかに時代の変遷によって衰退した中仙道の宿駅の悲惨な現実を印象付ける、語り手の意識がみえる。

軽井沢から御代田までの中仙道位荒廃して世に顧みられぬ道路はあるまい。其間に沓掛追分の二古駅がさびしい板葺の屋並を見せて居るばかり、風情ある松並木の影も無く、白壁を夕日に驕らせる村落もなく、一方は荒涼極りなき浅間のあら山、一方は褐色の佗しい丘と谷との連続、千曲の谿谷は前に展開して、其傍を縫って駛る汽車の白い煙——三間幅の広い道には、幾年前に通つたかと思はれる車の轍が太く痕跡を曳いて、其上に夥しく繁茂した雑草は早くも山の烈しい霜に打たれて枯れ尽して居た。

明治二十一年十二月一日、直江津線の軽井沢、直江津間が開通した<sup>(8)</sup>。この結果、中仙道を通う旅人の数が減り、追分宿は衰退を余儀なくされる。小説の冒頭で、きわめて象徴的に語られる街道の荒廃ぶりと汽車の運行の事実は、単に文明の進展や近代化が「千曲の谿谷」にも迫ってきた現実を示しているだけではない。時代の変化が人間生活を翻弄した、その影響の実態を物語るのだ。さらに荒涼とした景觀が暗示するものは、浅間山の裾野ゆえに目立った産業もなく、農業もままならない不毛な土地であるとい

う事実だ。いわば旧時代の交通の要請と需要から成り立っていた中仙道と「沓掛追分の二古駅」は、新たな時代の到来と変革に取り残され衰退したのだ。その上、作者は登場人物の会話の中で、この土地の現状と現実を周到に提示していく。(論者註、引用文中の／は改行、以下同様。)

『追分はとても開く訳には行かんですか、養蚕とか何とか適当な職業を与へて、恢復させることは出来ないのですか』／かう訊いたのは雑誌記者である。／『駄目です。浅間の灰で桑は出来ず、気候は寒し、作物は一切駄目、菜見たやうなものでさへ碌々出来ぬのですから、……全然封建時代の交通の必要の上に栄えた街ですから、今後は自滅するより他に仕方ありません。五六年も経つと、全く滅びて了ふでせう』

会話において過去の繁栄と現在の衰退と不毛の光景を示すことには、おそらくは二つの意味がある。一つは時代の変遷に敗れたこの土地の衰退を明示すること。次に、小説の背景として変革期の時代がみせる変化の実感を作中人物に語らせ、示す狙いである。

ところで『古駅』の冒頭が「御代田の停車場から追分の古駅へ二里」の道のりを「土地の豪農の若主人」、「五十位の老理学士」、「美しい庇髪」そして東京から来た「詩人」と「雑誌記者」の一行が「有名な油屋」の「衰退と荒廃」をみて「其処に味ふべき趣味」を感じる「ガタ馬車」での円居の場面から始まることには意味がある。無論、旅の事実の指摘ではない。「衰退と廃滅」の油屋を訪ねることは「味ふべき趣味」としての過去を実感することなのだ。馬車での円居の中で人々はこの実感を語り、そこから

意識される時代の変遷に対する感慨を人々は共感し、共有しているのだ。その共有のされ方は、たとえば理学士と若主人の次のような異質な証言によっても例示されている。

『追分の油屋と謂へば、元は大した者です。私などまだ覚えてますが、旅人宿で居て、そして其中に女郎屋がある。二階に張店がちゃんと出来て居て、女郎が絶えず二十人位、居たでせう……』と老理学士が話した。『私が越後から出る時分には、追分はまだ盛なものでしたからナ。馬、馬車、車、朝の賑かさなどはそれは大したものだ。だから、維新前はそれは盛なものだつたらう。何でも幕府時代に油屋で雇人を二百五十人も遣つて居ると言ふので、其禁制が出た位ですからナ』『兎に角大きかったです』と豪農の若主人が口を挿れた。『僕の祖父などからもよく聞きました。毎夜百組位の泊り客があつた相ですから』

油屋について語る理学士は、自らが体験し実感した繁栄を回顧する。だが、若主人の言葉は、いわば祖父から伝え聞いた話をしているに過ぎない。現存する油屋のイメージから過去を偲ぶことは出来ても、彼には繁栄の実感も記憶すらもないはずだ。ゆえに過去の油屋<sup>(10)</sup>について語られるこの二つのエピソードは実見と伝聞の相違がある。

しかし、円居する人たちの体験の異なる認識と話は、衰退という事実によって統括され、過去の追分と油屋の繁栄の実態を明示する。それはまた追分と油屋の過去を確かな事実として確認させる語りの仕組みなのだ。

「ガタ馬車」での円居は、「味ふべき趣味」がもたらす旅情と強いられた

時代の変遷を確かめる場として、機能している。そこでは時の流れの中で変化を余儀なくされる現実を人々に共感させ、さらには読者に意識させる語りの仕組みを認めることが出来る。

### 『古駅』が示す指標としての自然

追分周辺の「千曲の谿谷」がみせる景観とその自然を、花袋は丹念に描写している。ところで花袋が描いた景観と自然には何か意味が隠されているのであろうか。

後にはすぐれた一場の風景がパノラマのやうに展げられて居た。うねくと屈曲した路、根の上つた赤松の群、榛、檜などの雑木の林、落葉松の黄葉した丘、空しい谷は谷を孕んで、丘から丘へ続く褐色と鼠色の侘しい木立、処々に家屋が見えて、白壁が光つて、小春の暖かい日の光線が一種の厚さとのどかさを持つて居た。無数の谷と無数の丘から出来た千曲の谿谷には、今し其暖かい日が半分ほど照つて、谿流の南から北、北から西へ流れるさまがそれと指さゝれた。

景観を「パノラマ」として捉える認識には、自然がみせる造形美を意識する感受性がある。外来語(英語)である“panorama”とは西洋文化の移入により認知された景観美を発見する近代的視点であった。それは近代の日本人に景観美に対する新たな関心<sup>(11)</sup>を喚起させた。その関心が「すぐれた一場の風景」の美を見せた自然を発見させたのだ。つまり和歌や漢詩文などの伝統文化の規範が示す美観とは異なる、自然に対する美意識なのであ

る。

凡そ高原性の特色は此一瞬の下に残りなく展げられた。荒涼と雄大と寂寞とを混ぜた一種の気が到る処に満ちた。封建時代、中仙道の道路の栄えた頃にも、此荒涼たる光景は今と異なる処はなかつたらう。火山の烟の下に横はれる此天然の寂寥は、文明の力を以てしても如何ともすることが出来ぬのである。／＼一行は此背景の天然の美を飽までも指して語り合つた。詩人の胸には寂寥の情のこもつた美しい琴が弾ぜられた。雑誌記者の胸には都会の塵埃をかけ離れた清いやさしい情緒が燃えた。若い美しい娘の胸には——独棲のさびし味と詩歌に対するあこがれの情とが烈しい力を以て圧して来た。老理学士は半ば白頭なる頭を柱に寄せて、自己の三十年来の轢轢不遇と、栄達せる旧友の身の上と、不愉快なる自己の家庭生活とを思ひ遣つた。これに産期近き若い妻君の上を氣遣へる若主人——さま／＼の思を載せた馬車は、この美しい天然を背景にして、次第に敗滅に瀕した古駅にと近いて行つた。

他方、追分の「背景の天然の美」に感嘆しながらも「文明の力を以てしても如何ともすることが出来ぬ」絶対的な「天然の寂寥」もそこには備わっていた。例えば「荒涼と雄大と寂寞とを混ぜた一種の気が到る処に満ちた。封建時代、中仙道の道路の栄えた頃にも、此荒涼たる光景は今と異なる処はなかつたらう」と、その景観を通じ過去を追思する語り手は、時の流れの中で変化を迫られた人間生活の現実と変わらぬ自然の存在を語る。作中に描かれた自然には、人間生活の移り行く現実を人間に自覚させる役割

があるのだ。

追分の景観には〈美／寂寥〉という二重性が内包されている。だがそれは人間が意識する自然の姿である。人間の想像力が自然に様々なイメージを与えるのだ。だが人間の「文明の力」でも「寂寥」を取り除くことは出来ないと言ひ手は語る。それは自然を前にした人間が実感する無力さの証である。その無力感こそが『古駅』に示された指標となるべき自然の意味なのである。

### 歴史の文脈に生きる追分と油屋

語り手はもちろん、過去の追分や油屋の繁栄を知るはずはない。だが追分や油屋という言葉が喚起するイメージが語り手の想像力を刺激し、語り手に繁栄の過去を幻視させるのだ。

駅に入らうとして、一行は前に大いなる立石の影を長く夕日に曳いて居るのを見た。路はそこで二つに分れて北と西とに向つて居る。所謂北陸街道と中仙道との追分である。郎は北に妾は西に、楊柳の影こそ今は無いが、百年、二百年、三百年、旅客の別離の涙は限りなく此処に注がれたのである。早発の客の編笠の上に残月の寒い影も宿つたであらうし、紅涙一夕の飲にあぐがれて、後髪引かるゝ思ひに、顧み勝ちに旅に上つたものもあるであらう。情は幾度か燃え、幾度か消えた。人は幾度か逝き幾度か生れた。世は幾度か変り幾度か移つた。今や敗滅に近い古駅に猶この往昔の立石が長く影を夕日に曳いて居ると思ふと、一行の者は皆な一種の思に撲れた。

追分は街道の分岐点である。そこでは人々の往来の数だけの出会いと別れがあった。その邂逅のうちに潜む猥雑な情緒を「一行の者」は嗅ぎ取り、男女の交情の綾をみる。こうした情感と情景を「一行の者」や語り手に意識させたのが、歴史の文脈の中に生きる宿場花街、追分のイメージだ。

さらに理学士の記憶がその過去を確かな事実として人々に意識させ、共感させるのだ。

老理学士が詩人に耳語した。／『此処が左様ですよ、此処が張見世のあつた処です』／『此処が……』と、詩人は立留つて、仔細に見た。／かれの眼にも、雑誌記者の眼にも、今しも此細長い格子の中に、美しく、着飾った女郎衆のずらりと並んださまが、歴々と浮んだ。と、旅人の群が幾人ともなく草履を引摺つて、此格子戸の前に来て、喧噪と仇口を聞合ふさまが眼に映る。西鶴の世之助も二十八歳の時に此処に來た、そして『追分といふ所に遊女と名づけて、色の浅黒きを磨き、木賊伐る山家者の胼胝をなほさせ』と書いて置いた。色の世の中もかうなつてはもうお終だ。／時の力といふことが今更のやうに深く強く人々の胸を襲つた。

この油屋の繁栄を知る理学士の言葉は、宿場花街追分の過去もまた改めて知らせる。加えて語り手は、井原西鶴の『好色一代男』を引用した。引用が喚起する文学的コンテクストと理学士の体験が由来となり、過去の実態が明示される。つまり歴史の文脈に息づく追分と油屋を、多様な引用の想像力により定位させ、繁栄の内に潜む欲望の存在をここで改めて意識さ

せるのだ。

だが現実の油屋は「時の力」の前に、衰退の現実をみせるのだ。「時の力」の絶対的な存在感の前では人間は無力なのである。語り手もまた登場人物もその現実を意識せざるを得ないのだ。

新しい御宅拝見なら解つて居るが、衰へて、古びて、傾いて、廃滅に近い家屋を見に來たとは、余りに物好で、何だか話の調子が合はない。四人（論者註、油屋に縁のある若主人を除く一行の人々）の胸には確かに此の調子の好い老婦の言葉を聞きながら、一種異様の感を起した。（中略）追分の昔、賑かであつた昔、此の広い板の間に大小名の槍やら荷物やらが一杯に並んだ昔が詩人の胸にも雑誌記者の胸にも眼に見る様に分明と浮んだ。そして続いて、此江戸産れの主婦の若かつた時の姿、賑かに榮えて暮した当時のさまなどを思ひ出して、今のこの八畳と六畳とに仕切つた淋しい暗い生活に比べて見た。けれど主婦には其昔が既に余りに遠かつた。胸は其の榮華の追懷に殆んど倦んで、をり／＼想起しても何等の反響をも起さなかつた。

油屋の衰退の実感は特に東京から來た詩人と雑誌記者に衝撃を与えた。なぜならば、物語られた油屋の過去と現実の衰退との懸隔に変遷の傷跡をみて、その事実「時の力」の持つ威力を意識したからだ。

しかし現在の生活者である「老婦」はそれを受け入れている。そして作者もそれを意識する。しかも「四人の胸には確かに此の調子の好い老婦の言葉を聞きながら、一種異様の感を起した」と、作者は巧みに「異様の感」を抱く「四人」と若主人を切り離した。油屋と縁がある若主人にも油屋の

現実とは日常なのだ。衰退を余儀なくされながらも、そこが生活の場である現実を語り手は語る。歴史の文脈に生きる追分の繁栄の記憶は、油屋の衰退した実態を知ること、「時の力」の現実を知らせているのである。

### 理学士をめぐる語りの意味

これまで語り手は作品内部の「一行の者」が示した多層な声や追分や自然をめぐる言説を統括しながら、彼らの関心を伝えていた。だが、語り手は、明らかに理学士の認識に重なり、その不遇な半生に同情をみせている。

最も動かされたのは、老理学士であつた。轡轡三十年、同僚は皆栄達した。今の外務大臣は其校友である。自分より成績の悪かつた某々は理学博士、法学博士、文学博士となつた。であるのに自分ばかりはかくの如く飄零落魄して、公立の中学校にも居られず、山の中の私塾に来て、専門でも無い博物学や、漢学までも子供に教へて、すきな酒も碌々飲めず、不愉快な家庭に日を送つて居ると思ふと情けなくなつた。其後悔慚愧の念よりも、故郷の越後から東京に往復した当時のことが一層明かに其胸に上つた。彼れも此格子に凭つて、美しい櫺櫺の姿に憧れた一人である。けれど其頃の追憶は既に余りに遠かつた。信濃に来て追分駅のことを考えることがあつても、曾て一度もそれを思出した例は無かつた。が、今……現在眼に其格子の中の長い室を見、一夜を楽しく過した室が、かうして敗滅に近いであはれに残つて居るのを見ては、長い複雑した三十年の月日を一直線に直ちに其昔を眼前に歴史と浮べない訳には行かなかつた。

理学士の三十年の不遇の人生は具体的である。そして彼の人生は巧みに追分の現実と重なり、「時の力」を読者に意識させるのだ。語り手は理学士の人生を語ることで、運命に翻弄された人間への愛惜を示し、時代に残された追分の現実に重ねて行く。

さらに理学士が語らかつての油屋での記憶と回想は、実在する理学士の肉体を介して宿場花街追分と油屋の過去を具体化させてしまう。

かれは立尽した。若主人に『先生、何うしました？』といはれる迄われを忘れて立尽して居た。／急に我に返つて、『昔のことを考へると、変な氣になりました。此室に寝たんですからナ！』／『此室に、……』／『え、現に、此室に、』／『春夢揚州三十年ですナ。思ひ出に堪へんといふ訳ですナ』と、傍に居た雑誌記者が笑つて言つた。詩人も若主人も共に笑つた。老理学士も佻しい追懐から離れて、同じく声高く笑つた。娘ばかりは蒼白い顔をして居た。

理学士のこうした過去を耳にした時、娘を除く一行はみな笑つた。なぜならそれは、理学士の体験と過去の油屋の繁栄と猥雑な物語とが一致したからだ。さらに理学士の存在（肉体）を介しセクシャルな連想が喚起され、追分の猥雑な文脈が現前化したためである。

娘を除く一行の男たちが、いわば悪「趣味」にも似た関心から歓声を上げた時、語り手だけは明らかにこの一行とは違う関心から、理学士の言葉を受け止めていた。油屋での理学士の歓楽の記憶は、仮にその人生が、彼の求めた「栄達」の実現を果たした上での回顧ならば、それ自体、人生の

成功者の若き日を彩るエピソードに成り得たはずである。しかし、この理学士は、時代の変革期に教育によっていち早く頭角を現しながら「自分より成績の悪かった某々」は「博士」となる中「自分ばかりはかくの如く飄零落魄して」不遇な人生を生きているのだ。つまり語り手のまなざしは、理学士の存在と彼の言葉に潜む無常を読み取り、理学士の境涯と追分や油屋の現実の衰退を二重写しにするのである。

到る処自然の偉大なる力に対して人間の敗滅を語らぬはない。敗滅！  
然り、悲しむべき人間の敗滅！

語り手は先の生活者である「老婦」への関心と同様に、荒廃した油屋に理学士の人生の意味を重ねた。それは語り手が「自然の偉大なる力」の前には「敗滅」する存在でしかない人間の現実を認めているからだ。ここに「時の力」の絶対性を示す『古駅』の狙いがある。

### 『神津猛日記』からわかる『古駅』の世界について

道は例のダラダラ上りに行くうち、千曲の沿岸、佐久平の景色が展開してくる。晩秋のこの大景に島崎、田山の両氏も大変満足の様だった。／段々の景色を見ながら、島崎氏は二十六、七年許りも以前、未だ八、九歳の頃に一家が東京に移る時、此処を通して金米糖を玩具の鞆に入れて貰って喜んだことや、追剝に会った事など語りつつ進んだ。浅間も透明な空の下に頂上の碑石まで見える。／追分に入って（三十分を費した）油屋へ行って部屋などを見せて貰ったところが、鮫島氏

が或る一室を見て、「ア、茲だ、僕の宿った室は」と、三十二、三年も以前に中仙道を通って此処に宿ったことを思い出したなど、誠に面白いことであった。／廃駅の光景は、油屋で昨日も味噌蔵の壁が落ちたなど言うていたが、荒れゆく古駅の様が目前であった。<sup>(12)</sup>

この『神津猛日記』（以下『日記』と略記）には、花袋一行の追分の旅がそのまま記されている。これをみると小説『古駅』の実況は、馬車での歓談の様子や、車上からみる景観の雄大さ、そして鮫島の回想など、ほぼその時の模様を忠実に再現したことがわかる。さらに『日記』と小説を対照すると、『日記』にある藤村上京時の回想を、花袋が作品の中に取り込まなかったこともわかる。だが『古駅』は『日記』が示す一面的な事実の展開ばかりではない。これまで指摘したような追分と油屋を、特に理学士の不遇を語り の仕組みにより注視させるための工夫があった。

『日記』は『古駅』の特徴を明らかにする。それは追分や油屋の衰退が示す「時の力」、自然と人間の意味、理学士にみる「人間の敗滅」の意味を、語りを用い巧みに統括させ、変遷の現実を提示する作品の意図が、『日記』との対比により明確化できるからである。

さらにそれは花袋の鮫島理解の一齣でもある。おそらく藤村から鮫島の詳しい事情を聞いた花袋は、油屋での鮫島の体験談に共感した。油屋の現実と鮫島の憂愁と不遇を知った花袋は「人間の敗滅」の意味を意識したので。したがって追分の現実と鮫島への関心から生まれたこの作品は、単なる紀行文ではないのだ。「時の力」や「自然」の前では「敗滅」せざるを得ない人間の意味を物語る作品として、花袋は成立させたのである。

## 情況としての藤村詩

作中、花袋は藤村を「詩人」と呼んでいる。花袋は藤村の小諸時代とくに『落梅集』<sup>(13)</sup>に収録された数々の詩篇に詠われた信州と自然、そして“ruin”（跡・廃墟）としての古城址が喚起させるイメージを意識したのではないか。さらに藤村が作り上げた「千曲の谿谷」や浅間の裾野の詩的情況が『古駅』の創作とその背景には機能していると思われる。

例えば、花袋は明治三十七年、小諸の藤村を訪ねた際の紀行文『雪の信濃』<sup>(14)</sup>の中で、藤村及び藤村詩が喚起させる信州のイメージを次のように記している。

この大景（論者註、浅間山の景色）に対して、われはこれより訪ふべき友のことを思へり。友の住めるは、其の浅間の大麗の南に靡きたる処にして、地は北佐久の一部、火山の麓に眠れる小都会、いつまでも昔の挨拶と私語との小諸町とは、友もその作れる物語の中に記せり。あはれ友の詩に唄はれたるその古城址はいかに、寂寥比ぶべきものなき千曲川の谷はいかに、其質朴にして詩趣に富める住民の光景はいかに、ことに友の夕毎に出でて雲の美を研究せしといふ高原はいかなる趣を備へたるや。

この『雪の信濃』の記述をみると、浅間の麓に対する花袋の詩的形象の一端を藤村詩が担っていることがわかる。藤村詩が示した景観への視線と“ruin”としての古城址のあり方が、『古駅』を創作した花袋の意識にも反

映していたと認められるのだ。<sup>(15)</sup>

そこで藤村の有名な『千曲川旅情の歌』<sup>(16)</sup>をみてみよう。本詩篇には廃墟である小諸の城址と自然を相対化し、人間の営みと人生の意味を探る観照的な藤村の認識がある。

昨日またかくてありけり／今日もまたかくてありなむ／この命なにを  
齟齬／明日をのみ思ひわづらふ

いくたびか栄枯の夢の／消え残る谷に下りて／河波のいざよふ見れば  
／砂まじり水巻き帰る

嗚呼古城なにをか語り／岸の波なにをか答ふ／過し世を静かに思へ／  
百年もきのふのごとし

千曲川柳霞みて／春浅く水流れたり／たゞひとり岩をめぐりて／この  
岸に愁を繋ぐ

“ruin”としての古城址に、藤村は過去の「栄枯の夢」を幻視する。しかし現実には、古城と変わらずに流れる千曲川とその自然があるだけだ。藤村の過去を見据えるまなざしは、「時の力」と自然の意味、そして人間存在の意味を意識する。

藤村は明治学院時代にロマン主義時代の詩人たちから自然や人間、あるいは時（歴史）<sup>(17)</sup>をめぐる感慨を学んだ。ロマン派の詩人であるバイロンの『チャイルド・ハロルド』やゲーテの『ミニョンの歌』『イタリア紀行』などにみられるローマへの感慨を、藤村は小諸でみた城址によって改めて意識した。小諸を詠う本詩篇にはその感慨の再現がある。

『古駅』においても自然や“ruin”としての追分や油屋そして鮫島に対



示された関心は藤村詩の感慨と同質のものがある。花袋は藤村詩のイメージを『古駅』創作時に意識しそして利用したのである。

例えば大正期の花袋の追分をめぐる記憶には、藤村詩が彩るロマン主義的な“ruin”の認識が認められる。さらにこの意識は大正期の紀行文『追分の古駅』において具体的に「ローマのルウイン」として表出するのだ。

流石に本陣と言はただけであつて、大きな大きな家屋であつた。広い階段なども昔を思はせた。私達はローマのルウインでも見るやうな気分で、塵埃のたまつた中を一間一間と見て歩いた。その時分、女郎がゐる張店を張つたといふ室の前に来た時には『はゝゝ、さうですかね。こゝに女郎がゐるんですかね』かう言つて深く考へずにはゐられなかつた。いろいろな戯れの址、悲劇の址、涙の址といふ気がした。／かうしたルウインを見せられて、誰か人生の悠久なのを思はずにはゐられやう。また誰かかうしてゐる自己の時の中に、時といふ陥穽の中に陥つて行くのを思はずに居られやう。私達は唯黙つて、塵埃の深く積つた中を歩いた。／『Dust, all is Dust……』／それにしても、今は何うなつてゐるであらうか。(中略)時はすぎて行く。我々をDustにしなれば止まないといふやうにして、時は一刻一刻にすぎて行く。しかしその時の中に幻影のやうになつて残つてゐるルウインのさまの悲しさよ且さびしさよ。<sup>(19)</sup>

この旅を追想する花袋は、油屋と人間の現実「ルウイン」の悲哀をみている。過去を見据える意識は『時は過ぎゆく』<sup>(20)</sup>にも認められる、大正期の花袋文学の特徴でもある。

『古駅』には藤村詩が創出した千曲川河畔のロマン主義的な文学状況を支えとして「時の力」と自然と人間の意味を探る、大正期の花袋の認識の萌芽もまた内包しているのだ。

#### おわりに

『古駅』は花袋が旅先で見た追分、油屋の衰退から感じた感慨を、ほぼその旅程どおりに再現した小説である。しかし作品は旅の事実を単に再現しただけではない。廃れゆく追分と不遇な理学士の現実を指標として過去の繁栄を想起させ、「時の力」の威力や自然との対峙によって人事の無常を炙り出しているのだ。花袋は作品が示すこの認識を特徴付けるために、登場人物たちが語る追分や油屋の現実、自然への言説を統括する役割を語り手に担わせて、人事の無常と儚さを実感させる工夫をした。例えば、花袋の投影である雑誌記者でさえ、作中では単に旅情の慰みとしての廃駅の現実を感じ、話しているに過ぎない。いわば作者、花袋の認識の体現者ではないのだ。三人称の語り手を設定し構造的な語りを花袋が仕掛けたのは、追分と理学士の現実を重ね、そこに他の人物との差異を示す狙いがあったからである。つまり花袋は鮫島の人生の意味を問う意図のもとに『古駅』を創作したのだ。しかも花袋は追分、油屋の歴史的コンテクストと藤村詩が創出した千曲川河畔の詩的なコンテクストがみせる荒廃した“ruin”の実感を作中に巧みに取入れ、理学士の人生がみせる儚さを描き出したのだ。ところで藤村は神津に宛た書簡において「田山君は先頃の信州行を是非書いて見ると申居られ候。定めし面白き紀行文ならんと樂居候」<sup>(21)</sup>と記しているが、『古駅』は藤村の予測をはるかに超えていたと思う。『古駅』の実

態はこれまでみたように単なる紀行文ではない。鮫島の存在と“ruin”の実感が小説に深い陰影を与えていることを、藤村は認めたはずだ。

藤村は『古駅』によって花袋における鮫島の存在意義を読み取った。しかも大正期の花袋文学がみせた過去への関心としての“ruin”の実感と人生に対する花袋的関心の萌芽を、『古駅』の内に再確認したのではないか。だからこそ大正九年という時期に藤村は秋声とともに花袋を記念する選集に、鮫島を記念する小説を寄稿したと考えるのである。

#### (註)

- (1) 短編集『嵐』(昭和二年一月 新潮社)収録の際、『貧しい理学士』と改題。
  - (2) 『島崎藤村事典』(昭和五十七年四月 明治書院)の林勇氏の記述によれば、明治十二年七月、東京帝国大学物理学科を卒業後、文部一等属として翻訳局物理学科に勤務。また、東京女子師範学校の教諭、東京物理学校や共立女子職業学校の設立に尽力した。明治二十二年、新潟県立高田中学校(旧制)教頭の職を最後に退官。その後の不遇な生活の実態は、藤村の作品に詳しい。
  - (3) 明治三十九年三月、緑蔭叢書第一篇として自費出版。
  - (4) 明治四十四年六月から大正元年八月まで雑誌「中学世界」に発表。大正元年十二月、佐久良書房から刊行。本文引用は『藤村全集第五卷』(昭和四十二年三月 筑摩書房)。
- なお引用に際し基本的にはルビ等は省略し、漢字は新字を使用した。(以降、同)
- (5) 神津猛は藤村の『破戒』刊行に際し、資金面で援助をした人物である。明治三十九年一月、花袋の『草枕』(明治三十八年七月 隆文館)を読んだ神津は、篇中にある小諸の藤村を花袋が訪問した際の紀行文『雪の信濃』に感

- (6) 銘を受けた。花袋に興味を持った神津は、藤村の紹介により同年五月に花袋を訪問。以後二人の親交は深まる。この様子は神津の『日記』に詳しい。後に明治四十二年三月、佐久良書房刊行の『花袋集第二』に収録された。『古駅』からの引用は「文章世界」に発表の初出本文を使用した。『花袋集第二』所収本文と校合し、明らかに誤植と判断される箇所は訂正した。
- (7) 『日本一周後編』(大正五年八月 博文館)、『東京近郊一日の行楽』(大正七年二月 博文館)にそれぞれ収録されている。なお『東京近郊一日の行楽』では『追分の古駅』という表題が付されている。

- (8) 上田、軽井沢間が延伸開通し、田中・小諸・御代田・軽井沢駅が開業した。
- (9) 「若主人」は神津猛、「理学士」は鮫島晋、「美しい庇髪」は中沢べん、「詩人」は島崎藤村、「雑誌記者」は花袋が、それぞれモデルである。

- (10) 中勘助は、大正三年五月と四年五月に脚気療養のために追分の油屋に逗留している。そして、その滞在の記録を日記体随筆『裾野』に記している。大正三年五月二十七日の日録の一部を抜粋しておく。

「私の宿は油屋といつて昔の脇本陣なのだが、いひ伝へによるとそのじぶんには日に百人からの泊り客があつて、表向き七十五人とかの女がゐた。それがあるとき疫病のために七十五人ながら死んでしまつたらまだあとに七十五人残つてたといふほどの全盛で、今では当時の三つ一ほど狭くなつてると道づれのの人にきいたが、そして古びてまつ黒にこそなつてはゐるが、まだしつかりとしたずるぶんな大きな家である。この街道を上り下りの旅人は店先の黒い壁に油屋と白く塗り出した昔風の屋号が目につくであらう。そこにはもはや一駄の荷馬の影もみえず、軒下へ燕が飛んできては巢をこしらへてゆく。季節はづれで臨時の停車場さへないこの頃では客といへばたつた私ひとりである。」と過去の繁栄のエピソードと現在の衰退を記している。本文引用は『中勘助全集第四卷』(平成元年十月 岩波書店)。

なお『裾野』に関しては拙稿「中勘助初期随筆研究・『裾野』研究――

「裾野」の世界とその成立をめぐる——」(平成十年三月「三郎山論集第5号」上田女子短期大学)を参照願いたい。

- (11) 明治二十三年四月から五月にかけて上野公園(第三回内国勸業博覧会場)ならびに浅草公園でパノラマ館が開館し東京で話題を呼んだ。また十一月には浅草に浅雲閣(十一階)が開場し、「登高と俯瞰の魅力が人気を集めた」(樋田満文『東京記録文学事典』平成六年五月 柏書房)という。島崎藤村も『千曲川のスケッチ』において「パノラマのやうな風光は、斯の大傾斜から擅に望むことが出来た。遠く谷底の方に、千曲川の流れて行くのも見えた」と「千曲の谿谷」の景観を「パノラマ」に譬えている。

- (12) 明治三十九年十一月四日の日記。本文引用は『藤村全集別巻』(昭和四十六年五月 筑摩書房)。

- (13) 明治三十四年八月、春陽堂より刊行。

- (14) 明治三十七年十二月、雑誌「太陽」に発表。本文引用は『定本花袋全集第十六巻』(平成六年七月 臨川書店)。

- (15) 『雪の信濃』と同じ内容を大正期の紀行文『小諸の古城址』で花袋は再現しているが、花袋はここで藤村詩が作り出した小諸の持つ詩的イメージを強調している。

『藤村詩集』の中にある『常磐樹』『労働』『収穫』それから『小諸の古城のほとり』それは皆な此処で出来たのであつた。『破戒』も初の部分は此処で書かれた。藤村君に取つても私に取つても、文学愛好者に取つても、なつかしい小諸の町だ。本文引用は『東京近郊一日の行楽』(大正十二年七月/昭和四年六月八刷 博文館)。

- (16) 明治三十三年四月、「文界」に『一小吟』の題名で発表。その後『落梅集』所収に際し『千曲川旅情のうた』と改題。本文引用は神田重幸編『島崎藤村詩への招待』(平成十二年四月 双文社出版)。なお、本詩篇については同書所収の拙稿「鑑賞」を参照願いたい。

- (17) 藤村は『予の二十歳前後 明治学院の学窓』(明治四十二年八月「文章世界」)において「あの時分は、よく寄宿舎の窓のところへ行つてその時分青年の間に愛読されたセーキスピヤや、ゲーテや、バイロンなんかを読んだり論じあつたりした。」と回想している。

- (18) 例えばバイロンの『チャイルド・ハロルド』(“CHILDE HAROLD'S PILGRIMAGE”)では現前するローマの廃墟を見て、時を意識する感慨を次のように詠う。“Oh Time! the beautifier of the dead, / Adorners of the ruin, comforter / And only healer when the heart hath bled; / Time! the corrector where our judgments err, / The test of truth, love——sole philosopher, / For all beside are sophists——from thy thrift, / Which never loses though it doth defer—— / Time, the avenger! unto thee I lift / My hands, and eyes, and heart, and grave of thee a gift.”(あはれ「時」よ! 死者をより高く美化するもの、/ 廃墟を粧ひするものよ、心の劇しく悩む時、唯一人の慰むるもの、またそを癒やし得るものよ! / げにや「時」よ! 判断の錯誤する時に、それを正すものよ。/ 真理と愛情との深さを試みるものよ、——かくて唯一の眞の哲人よ、/ それ以外はすべて単なる詭弁の輩にすぎざるなれ——/ 汝の蓄積された知識より、たとへ、それが与へらるゝも失ふことなく、——「時」はまさに復讐者なり! / 汝に向けわが手を、わが眼を、わが心をもまで、さしのばし、/ 一つの恩恵を乞はんとすれど、汝は死者を棺に入れてこそその値を定むるなれ)。バイロンの本文引用は『研究社英文学叢書』収録の“CHILDE HAROLD'S PILGRIMAGE”(大正十一年一月 研究社/昭和五十七年六月復刻 研究社)を、日本語訳は『バイロン全集2』(昭和十一年五月 那須書房/平成七年七月復刻 日本図書センター)所収『チャイルド・ハロルド世界歴史第四巻』の小林史郎訳。
- (19) 本文の引用は註(15)同。

(20) 大正五年九月、新潮社より刊行。

(21) 明治三十九年十一月二十七日付神津猛宛島崎藤村書簡（葉書）。本文引用は『藤村全集第十七巻』（昭和四十三年十一月 筑摩書房）。

(22) 花袋は『半日の閑話』（大正十三年九月十二日から十四日まで読売新聞に連載）において、歴史と歴史小説創作への思いを伝えている。

その中で「以前には、歴史などは、遠い、遠い、この身などとは何の関係もないつくり話か何かのやうに思はれたが——歴史中の人物も単に英雄とか豪傑とかいふやうにしか思はれなかつたが、今ではもつと密接な関係を私の身辺に持つて来るやうになつた。この身も歴史の堆積の中の、一つの点であるといふことなどもはつきりと飲み込めるやうになつて来た。で、その結果として、その宇宙——山川の依然としてもとのまゝであるといふことが常に深い感興を私に齎して来た。（傍点、論者）」と自らの肉体を介して時の中に人を捉える意識と、自然との関係への思いを記している。これは追分と油屋の過去を鮫島存在を介して実感した過去への意識と気脈を通じる指摘ではないだろうか。本文引用は『定本花袋全集第二十三巻』（平成七年三月 臨川書店）。

（いちかわ ひろあき 日本語日本文学科）